

【研究ノート】

ヨーロッパにおける合理的選択社会学，説明社会学，分析社会学の最近の研究動向（その4）

久 慈 利 武

著者は教養学部論集 180, 181, 185 号に，ヨーロッパにおける合理的選択社会学，説明社会学，分析社会学の最近の研究動向を連載してきた。読み直してみても，誤植，著者の筆の走りから訂正したい箇所が散見される。本号は，その訂正と執筆時に不明であった事柄で，のちに明らかになったこと，その後出版された文献の紹介に充てたいと思う。

●教養学部論集 181 号訂正 p 79-80

マクレランドの逆台形図形をコールマンのそれと酷似していることを最初に指摘したのはブリュダール（Brüderl 2004）である。中略

彼等と別に，オブもマクレランドの逆台形に気づいている（Opp 2009, 2011）。オブがそれを知ったのは，スペイン社会学雑誌 2006 年掲載の，フィリポ・バーベラが，リンデンベルクとの個人通信で「コールマンにマクレランドの逆台形図形を教えたのがリンデンベルクである」と確認を取った記述を目にしたためである。

オブにメールで，「コールマンの逆台形図形とマクレランドの逆台形図形の酷似に気づいたのは，ブリュダール（Brüderl 2004）論文を通じてか，それともフィリポ・バーベラ（Barbera 2006）論文を通じてか」と尋ねたところ，「質問の内容が理解できない。わたしがコールマン逆台形図形とマクレランドの逆台形図形の酷似に気づいたのは，ハルトムート・エサーの『社会学：その一般的基礎（1993）』を通じてだ」という回答が返ってきた。さっそくエサーの『社会学：その一般的基礎（1993）』に当たってみたところ，p. 100 図 6.2 にマクレランドの逆台形図形が載っていた。オブは 2004 年ヨーロッパ社会学評論誌に，エサーの『社会学：その一般的基礎（1993）』と『社会学：その個別的基礎（1999～2001）』6 巻を対象とした書評論文（Opp 2004）を掲載しており，そのときにマクレランドの逆台形図形を目にしていたのである。

オブにお詫び方々次の文章を削除したい。

オブがそれを知ったのは、スペイン社会学雑誌 2006 年掲載の、フィリポ・バーベラが、リンデンベルクとの個人通信で「コールマンにマクレランドの逆台形図形を教えたのがリンデンベルクである」と確認を取った記述を目にしたためである」（教養学部論集 131 号 p 80）

差し替え文章

オブがそれを知ったのは、ハルトムート・エサーの『社会学：その一般的基礎（1993）』を通じてであった。その 100 頁に載っている、図 6.2 のマクレランドの逆台形図形をみたためであった。

エサーの『社会学：その一般的基礎（1993）』p. 98 注に次の記述がある。

図 6.1 社会学的説明の基本モデルは、その基本構造で幾つかの先行提案がある。

Siegwart Lindenberg/Reinhard Wippler 1978 “Theorienvergleich: Elemente der Rekonstruktion.” in Karl-Otto Hondrich/Joachim Mattes (Hrsg.) *Theorienvergleich in den Sozialwissenschaften*. Darmstadt und Neuwied. S. 219-231.

同じアイデアは次にも見いだされる。

Gudmund Hernes 1977 “Structural Change in Social Processes” in *American Journal of Sociology* 82 : 513-547.

Raymond Boudon 1980 *Die Logik des gesellschaftlichen Handelns. Eine Einführung in die soziologische Denk- und Arbeitsweise*. Darmstadt und Neuwied S. 122ff.

James S. Coleman 1990 *Foundations of Social Theory*. Cambridge. Kap.1.

ヴェルナー・ラオプとトマス・フォスの共著論文（2018）でも、コールマン図形の先行者達としてエサーの挙げている論考と同じものを挙げている。彼等はエサーのこの箇所を参照したものである。

Werner Raub/Thomas Voss 2018 “Micro-macro models in Sociology: Antecedents of Coleman’s diagram.” in B. Jann/ W. Prezeziorka (eds.) *Social Dilemmas, Institutions and the Evolution of Cooperation*. pp. 11-37. Berlin : De Gruyter

●教養学部論集 181 号 p. 78 補足

前稿で、リンデンベルクがコールマンに、マクレランドの逆台形図形を教えたことをラオプ/フォスが語ったことに触れたが、リンデンベルクがコールマンに教えたのはいつであったかに触れなかった。

これについては、バーベラは例の箇所（Barbera 2006 : 44 : n15）で、コールマンが 1981

年に組織した, ベルリンのミクロ・マクロ関係問題に関するあるセミナーに, リンデンベルクを招いたことに触れている*。そこには, リンデンベルクがコールマンにマクレランドのチャートを示したのはその時であったとしっかりと書いてある。前稿執筆時にうっかり見落としていた。コールマン自身が『社会理論の基礎』のまえがきに, サーバティカルでベルリンのヴィッセンシャフト・コレク (Wissenschaft Kolleg zu Berlin) に1年間 (1981秋-1982夏) 滞在していたことに触れている (客員研究員として滞在したことのある石田雄は, 西ベルリン・高等科学研究所と呼称している)。

なお, コールマンが逆台形図式を最初に使用したのは活字では, 『応用社会学研究』12巻 (1984) 年である。この論文の内容は, ドイツ社会学者とアメリカ社会学者の合同会議『ミクロ・マクロ・リンク』所収論文とまったく同一の内容である。

*Barbera, F. 2006 “A Star is Born? The Authors, Principles and Objectives of Analytical Sociology.” *Papers Revista de Sociologica* 80 : 31-50.

●教養学部論集 181号 p. 80 削除訂正

バーベラはどういうきっかけでマクレランドとコールマン図形の類似を知って, リンデンベルクに確かめようとしたのであろうか。それはそのような噂がすでに蔓延していたからであろう。イタリアの分析社会学者のバーベラはリンデンベルクと接点はない。噂の発生元として考えられるのは, 分析社会学ヨーロッパネットワークに加入し, 大学で当番校を引き受けているユトレヒト大学のラオプである。中略 リンデンベルクに確認を取ったのがラオプで, そのラオプにリンデンベルクに確かめるように依頼したのがブリュダール(リュエーデマン)の寄稿を見たフォスであらうと推察される。

ラオプがリンデンベルクに確かめた期日は2016年, 12月30日 (Raub/Voss 2017 : 31 : n11) である。バーベラがリンデンベルクに確かめたことを断言している論文は2006年発行である。バーベラが噂を嗅ぎつけたのは, ラオプからではないようだ。ラオプは同じ箇所 (Raub/Voss 2017 : 31 : n11) で, リンデンベルクがコールマンにマクレランド図形を教えたことを知っている複数の人物がいることを語っている。イギリスのピーター・エーベル, フランスのレイモン・ブードン, イタリア出身で現在フランスに暮らすギアムルカ・マンツォである。マンツォは論文 (2007 : n14) にバーベラ論文の例の箇所を再録している*。またラオプはマンツォとの会話で, ブードンが事実を知っていると語ったことに触れている。バーベラが噂を聞きつけたのは, 2006年の論文に載せる直前とすれば, ブードンとバーベラから, 同一論文でソルボンヌとトレント大学から2006年に社会科学博士号を授与されているマン

ツォが噂の出所と考えられる。ラオプが噂の発生元ではないかと述べた箇所（上記下線部）は削除したい。ラオプには、お詫び申し上げたい。

*Manzo, G. 2007 “Progrès et ‘urgence’ de la modélisation en sociologie. du concept de ‘modèle générateur’ et de sa mise en CEuvre” *L’Année Sociologique* 57(1) : 13-61.

○ラオプ & フォスのコールマン・ダイアグラムがコールマンが思いついたものでなく、リンデンベルクから教えてもらったマクレランド・ダイアグラムを踏襲したものである、という風説に、コールマンを擁護する主張がある。ヘルシンキ大学のペトリ・イリコスキがリンコピン大学分析社会学研究所ワーキング・ペーパーに、「コールマン・ポートで考える」を發表している。

1. コールマン・ダイアグラム（コールマン・ポート、コールマン・バスタブ（ドイツ語圏））は、コールマンの論文（1986 初出, 1987）著書（1990）では、人心をすぐ掴むことはなかった、Hedstrom/Swedberg（1998）の編著の編者の呼びかけ起草文で、コールマン・ダイアグラムの修正（状況メカニズム、行為メカニズム、変換メカニズム）を使用して以来、ミクロ水準とマクロ水準の連結のポピュラー表現となった。分析社会学の文脈に限らず、方法論的個人主義、合理的選択に依って立つ社会学に限らず社会学全般においても。

2. コールマン・ダイアグラムがかくも興味を惹いたのには2つの理由が考えられる。

(1) ミクロ水準とマクロ水準をどう関係づけるかという社会理論のコア・イシューにアドレスしていること。「大規模な事柄が小規模な事柄にどう影響を与えているか」、「マクロ現象がミクロスケールの出来事、活動からいかに構成されているか」

(2) このダイアグラムは非常に珍しいビジュアルな表示であること。社会学的思考のための認知的ツールとして役立つことができるビジュアルな表現である。スキームの中身は原則として言葉でつながれているものの、容易く想起できるダイアグラムは認知的に効率的な表示を与える。ダイアグラムの抽象形式は様々の適用に対応することを可能にする。ダイアグラムは既に知られていることを要約するための単なる工夫と言うよりも、生産的な認知のツールである。イリコスキはコールマン・ダイアグラムを McClelland ダイアグラムと似て異なるものと必死に強弁している。まるでイリコスキの口を借りてコールマンが主張しているようである。ただ一つ興醒めするのは、イリコスキが McClelland を McClenon と再三にわたって誤記していることである。

●教養学部論集 180 号訂正 p. 106

リンデンベルクがフローニンゲン大学を 2007 年に退職と記したが、完全退職した形では

なく, 連合大学院を通年1コマ引き続き担当している。所属先がフローニンゲン大学の他に, チルブルク社会行動科学大学院となっている。

●教養学部論集 180 号訂正 p. 107

リンデンベルクはハーバード大学で博士学位取得後4年間プリンストン大学の助手をしていた。

訂正

ハーバード大学博士課程在学期間は1966-1969年, 博士学位は1971年取得, プリンストン大学助教授在職期間が1969-73年である。したがって, ハーバード大学博士学位取得はプリンストン大学助教授在職中である。

●教養学部論集 181 号 p. 79 補足

ヴェルナー・ラオプによるコールマン図形とリンデンベルク・スキームの同形性の指摘を紹介したが, 分析社会学者からすると, ラオプのこの試みは, 法則定立型説明とメカニズム型説明の違いを無視するものだと異議申し立てがなされても仕方がないであろう。また, コールマン図形(ボート, 逆台形)の採用をメカニズム型説明の典型とみなすのも問題がある。実はこの考えを広めたのは, ヘドストローム & スベドベルクの社会的メカニズム・シンポジウム基調報告である。そのため後述するように, シュミットはメカニズム型説明の典型としてコールマン図形を採用して論を展開している。ミクロ水準とマクロ水準の連結を重視することに注目すれば, コールマン図形はメカニズム型説明図形ではなく, 説明社会学の説明図形である。

ラオプによる同形性の着想は, リンデンベルクとともに, 創生期のオランダ説明社会学集団を牽引してきたラインハード・ウィプラー(彼はラオプのユトレヒト大学での博士課程の指導教員で博士論文審査の主査)の影響が伺われる。ウィプラーは, ミヘルスの寡頭制理論, リプセット等の寡頭制例外理論(組合デモクラシー)の集合レベル理論を, ハーシュマンのアパシー・ボイス理論(個人レベル理論)から演繹している。しかも個人レベルの理論は個人一般でなく, 組織のヒラ成員行動と幹部行動に関する理論に区分し, それからリンデンベルクの「変換規則」の手続きを用いて, 寡頭制が生じる場合と, 生じないで民主的に運営される場合(集合帰結)を導き出している(Wippler 1981)。

さらにウィプラーは, 別稿(1982)で, 集合帰結が個人行動の初期条件にフィードバック作用することを考慮するレイモン・ブードンの変換過程の累積的フィードバック効果を取り入れた図式を継承発展させている。ラオプがコールマン図形とリンデンベルク・スキームの

同形性を指摘した背景には、師匠のウィプラーのこのふたつの成果が念頭にあったからであろう。尚、ウィプラーは昨年 4 月 9 日に 89 歳でなくなった*。

Wippler, R. 1981 “Erklärung unbeabsichtigter Handlungsfolgen : Ziel oder meilenstein soziologischer theorienbildung?” in J. Mattes (Hrsg.) *Lebenswelt und soziale Probleme*. Campus. S. 246-261.

Wippler, R. 1982 “The Generation of Oligarchic Structure in Constitutionally Democratic Organizations” in W. Raub (ed.) *Theoretical Models and Empirical Analysis*. Explanatory Sociology Publications. pp. 43-62.

*著者は 1988 年 10 月に、ユトレヒト大学ウィプラー教授のもとで客員研究員として滞在した。『理論と方法』(1989) 4(2) : 101-108 「オランダ・西ドイツの説明社会学者をたずねて」に、ウィプラーの経歴を紹介している。

●教養学部論集 180 号訂正 p. 108

ブードン 2007 年刊行『合理性の一般理論 (独語版)』の記述中で仏語原版になく独語版に追加されたのは、序論でなく序文である。正確に述べると、もともとあった仏語版序文の他に、独語版独自の序文が追加されたのである。

●教養学部論集 185 号訂正 p. 64

佐藤嘉倫の国際社会学会合理的選択部会長在任期間を (2006-2010) に訂正

●教養学部論集 185 号訂正 p. 65

福岡集会日本側参加者名 名前の誤記の正しい姓名
大浦宏邦, . . . 豊島慎一郎, 友知政樹, 磯道義典

●教養学部論集 181 号補足 p. 77

H. Albert の語るところによれば、V. Vanberg (彼は学部はミュンスター大学出身) がハビリタツィオンの審査を求めて最初に提出した先は、Vanberg が博士論文を提出し認定されたベルリン工科大学であったが、内容が社会学か経済学かと揉める学際的内容の論文であったため、審査主査を引き受ける者がいないという理由で受理してもらえなかった (博士学位を認定したのは Rainer Mackensen)。そこで Vanberg は一切の仲介者なしにマンハイム大学のハンス・アルバートに、直接あつたのであった。ハンス・アルバートはケルン大学助手時代に経済学部社会政策学講座の助手でいながら、社会学講座の主任ルネ・ケーニッヒにハビリタツィオン審査を依頼したが、社会学ではない学際的研究であることで断られたという似た体験の持ち主だったことから、アルバートが Vanberg に同情したことは否定できない*。

*アルバートはこれまでの回顧録では、自分の教授資格請求論文が審査自体が拒絶されたように書いていたが、回顧録増補版 (H. Albert 2007 : 80-83) に、審査にかけられたが、審査員 7 名の内 3

名の同意しか得られなかったため、不通過となったこと、その不同意の理由は、研究助手の仲間が、アルバートの教授資格取得を妨害するために、アルバートとの個人的会話で共産主義者だと述べたことを暴露したことが関係していた(1955年のこと)を告白している。彼の所属する社会政策学講座の指導教授 Gerhard Weisser は、1957年に自分が主査を務めた審査委員会で、ハビリタツィオン審査を通過させた。内容は社会学講座に提出したものと別社会政策関係の既発表論文を寄せ集めたものであった。落とされた論文は「市場社会学と決定の論理。社会学的視点から見た経済学の問題点」として1967年に出版されている*。

*H. Albert 1967 *Marktsoziologie und Entscheidungslogik. Ökonomische Probleme in soziologischer Perspektive*. Neuwied/Berlin

アルバートは前記の回顧録で、ファンベルクがジェームズ・ブキャナンの招きで、ジョージ・メーソン大学、公共的選択センターに招かれたきっかけは、ファンベルクが1981年にリバティ財団後援「資本主義の哲学的経済学的基础」会議の報告「ハイエックの進化主義とブキャナンの契約論的立憲主義」であったと吐露している*。ファンベルクをジョージ・メーソン大学、公共的選択センターに招聘するために、ブキャナンがファンベルクに急遽執筆を依頼したというのが真相であろう。ちなみに、1982年刊行のハビリタツィオン『市場と組織：個人主義社会理論と団体行為の問題』は、互酬的交換と生産的交換 = 調達・再分配 (pooling-redistribution) が主たる内容で、ホーマンズ・ブラウの交換理論とコールマンの集合決定理論・団体行為者論を紹介したもので、ハイエックの言説もブキャナンの言説もどこにも見あたらない。ファンベルクがにわか学習して、急遽まとめたことが歴然としている。

*V. Vanberg 1981 "Liberaler Evolutionismus oder vertragstheoretischer Konstitutionalismus" Conference on Philosophical and Economic Foundation of Capitalism. (Freiburg)

●教養学部論集 181号訂正と追加 p. 77

カール・ディーター・オップがチロル地方アルプバッハ、ヨーロッパ大学週間で、ハンス・アルバートを初めとする経済学者、哲学者、心理学者、社会学者と交流したのは、1978-82年頃と推測したが、正確な時期を伝えるオップ自身の証言がみつかった。

ハンス・アルバートの99歳を祝う論集に、オップも、アルプバッハでのアルバートの思い出を寄稿している (Opp 2019)*。彼はアルバートから声をかけられて、1976年に創設され、2013年まで続いた、年2回開催されたアルプバッハ・フォーラムの学際的社会科学ワーキンググループのメンバーになっている。彼の他は、経済学者 Hans Albert, Brno Frey, Wilhelm Meyer, Viktor Vanberg, 心理学者 Klaus Foppa, Kurt Stapf, Wolfgang Ströbe が構成員であった。彼の語るところでは、毎回ほとんど全員が参加し、会議での発表と会員のコメントの刺激を楽しみにしていたそうである (Opp 2007)**。

*Opp, K-D. 2019 "Der Unruhestifter aus Köln : Hommage an Hans Albert."

**Opp, K-D. 2007 “Social Psychology is not enough. The Interdisciplinary Social Science Working Group.” In Miles Hewstone et al. (eds.) *The Scope of Social Psychology. Theory and Applications. Essays in Honor of Wolfgang Stroebe*. pp. 295-308.

ハンス・アルバートの 99 歳を祝う寄稿集* が 2019 年に出ている。2017 年に編集者がアルバートにゆかりのある 40 名に、電子メールで 4 頁以内で寄稿を呼び掛けて出来上がったものである*。社会学関係者では、オップが「ケルン大学の煽動者」、ファンベルクが「アルバートと社会学者から経済学者へのわたしの歩み」、リンデンベルクが「アルバートから教わった 3 つの場所」、エサーが「Eugen Drewermann とライン批判主義」、(エルンスト・トピッシュの教え子) ミヒャエル・シュミットが「ハイデルベルクからマンハイムのアルバート・ゼミに参加した思い出」を寄せている。

*Giuseppa Franco (Hrsg.) 2019 *Begegnungen mit Hans Albert. Eine Hommage*. Wiesbaden : Springer.

●教養学部論集 180 号訂正 p. 109

ミヒャエル・シュミット、アンドレア・マオラー共著『説明社会学 (2010)』の第 3 部応用領域で、二者間の利害布置 (補完関係利害の調整・共通利害の協力・対立利害の対立) の分析に充てている。そこでは、その着想の前身として、エドナ・アルマン-マルガリットとヤン・エルスターを挙げたが、改めて確認してみたところ、アルマン-マルガリットの場合は調整、協力、不平等問題、ヤン・エルスターの場合は協力問題、交渉問題で、エルスターには、調整問題の視点はない。シュミット、マオラーは交渉問題を対立問題の一種として取りあげている。なお応用問題をあつかう第三部は、第二部で彼等がその分析スキームを解説しているリンデンベルク、エサーの名は出てこず、ゲーム理論を用いて彼等自身が独自の分析を行っている。

シュミットの『メカニズム的説明の論理 (2006)』を紹介するに当たって、マートン→コールマン、ブードン→リンデンベルク、エサーという学問的影響の系譜から整理したが、シュミットは、ミクロ水準とマクロ水準を連結するコールマン・ブードン図形をメカニズム型説明の典型とみているからである。ミクロ水準とマクロ水準を連結するヘドストローム & スウェドベルクのコールマン・ボート (バス) そっくりのダイヤグラム (図形) が波紋を呼んだものである (Hedstrom/Swedberg 1996, 1998)。エルスター、シェリング、コールマン (ただし新薬普及研究者のそれ) のメカニズム型説明と明らかに異なる。シュミットにおいては、説明社会学と分析社会学の区別がついていないのではないか。エルスターの法則による説明とメカニズムによる説明の違いの指摘、前者は説明能力と予測能力を兼ね備えているが、後者は予測能力を欠くという見方に再注目する必要がある (Elster 1989, 1998, 2007)。

●教養学部論集 185 号追加 p. 68

アンドレアス・ディークマンの経歴で、触れねばならないのに抜け落ちていた事柄があった。1979年にハンブルグ大学で博士学位を得たのち、1984年までオーストリー・ウィーン高等研究所で、Anatol Rapoport に師事している。1984～1987年ロルフ・ツィーグラーのもとでミュンヘン大学研究助手、1987年教授資格取得、1989年マンハイム大学、1990～2003年スイス・ベルン大学、2003～2017年スイス・チューリッヒ ETH 教授歴任。彼がツィーグラー、オプの祝賀論文集の編者になっていることは触れたが、ラボポートの75歳祝賀論文集の編者も務めていることが抜け落ちていた。

A. Diekmann & P. Mitter 1986 *Paradoxical Effects of Social Behavior. Essays in Honor of Anatol Rapoport*. Heidelberg, Physics.

●教養学部論集 180, 181, 184 号に触れなかった新事実。

○アンドレア・マオラーは、2019年刊行の『ドイツ連邦共和国における社会学派』への寄稿論文「説明社会学派 隣人、席、ネットワーク、受容*」を発表している。

説明社会学派は、最初ケルン大学の社会学に1970年代前後に自然発生的に登場した。Karl-Dieter Opp, Rolf Ziegler, Hans Joachim Hummell, Hartmut Esser が初発者である**。グループやネットワークは存在しなかった。フンメルとオップの交友、フンメルとツィグラーの長年にわたる共同研究活動はあったが、彼等が Hans Albert に私淑してグループをなしたわけではなかった。当時のケルン大学の社会学の主任教授は Rene König であり、彼はデュルケム、パーソンズに近い学風だったが、指導生たちが研究する内容、方法に、自分の好みを押しつけることはなかった。また当時 Hans Albert が社会政策講座の研究助手ながら、社会学のゼミに出入りしたり、ハビリタツィオン取得後は、私講師として講義をしていたが、Opp も Esser もケルン大学研究助手当時、Albert との接触はなかった。Albert が Opp と接触を持つのは、ケルンを離れてマンハイムに就任し、オーストリー、アルプバッハ大学週間での交流からである。Esser とは、マンハイム大学彼のポストの後任に就任後である***。

*その草稿は、彼女の著書 (Maurer 2015) に載せられている。

**Opp は 1937 年生まれで、1963 年学士、1963～1967 研究助手、博士学位 1967 年、教授資格請求 1970 年、Ziegler は 1936 年生まれで、1960 年学士、1960～1967 研究助手、博士学位 1967 年、教授資格請求 1971 年、Hans Joachim Hummell は 1941 年生まれで、1965 年学士、1965～1969 年研究助手、博士学位 1969 年、教授資格請求 1972 年。Esser は 1943 年生まれで、1969 年学士、1970～1974 年研究助手、博士学位 1974 年、教授資格請求 1981 年。

***Maurer は Hummell を挙げていない。代わりに Gunter Buschgas を挙げています。ブシュガスは 1926 年生まれで、エアランゲン—ニュルンベルグ大学の教授であった人だが、詳しい経歴は不明である。Werner Raub (当時エアランゲン—ニュルンベルグ大学研究助手) と共編で *Soziale Bedingungen-Individuelles Handeln-Soziale Konsequenzen* を 1985 年に Peter Lang から出している。

Maurer は S. Lindenberg もケルン学派の一員に数えているが、彼はケルン大学に入学しているが、音楽科作曲専攻で入学したものの、社会学に進路変更してフライブルク大学に入学しなおしている。そこで彼が師事した Eduard Garten Baumgarten (Max Weber の甥) がマンハイム大学 (当時は経済学部の単科大学でマンハイム経済大学と呼称) に招聘されたので、彼の指導生三人とも、3 年次にマンハイム大学に在籍先を移している。バウムガルテンは部分訳のある『マックス・ウェーバー：著作と人物』で有名だが、その書の脚注に Lindenberg から 3 人が索引づくりを手伝ったことが記載されている。マンハイム大学で、新任のハンス・アルバートのマンハイム大学指導生一期生となり、卒業後ハーバード大学博士課程に留学している。したがって Maurer がしたように、Lindenberg をケルン学派の一員に数えることは適切ではない。かといって、マンハイム学派ともいえない。Lindenberg の社会学の研鑽を積んだのはハーバード大学大学院時代である。

Maurer が説明社会学学派の二番目の牙城としてあげるマンハイム大学では、彼女は、Lindenberg, Vanberg にしか言及していないが、マンハイム大学の説明社会学学派の主要研究者は Hartmut Esser が育てた世代が若い研究者たちである。Esser の祝賀論集の編者に名を連ねている人たちがそれである。同じく、Maurer が説明社会学派の二番目の牙城としてあげるミュンヘン大学は、Rolf Ziegler の弟子たちである。彼が主宰したベネチア・セミナーの出席者の教え子がミュンヘンを離れた後も、セミナーに連なり、研究者のネットワークが広がった。

Maurer の説明社会学派紹介論文の欠を補うのが、Diekmann & Voss (2016) 「ドイツ語圏における合理的選択理論の受容」である。ドイツへの数理社会学研究者の養成に貢献したものととして、Ziegler と Hummell が 1974~1982 年まで続いた MASO と呼ばれる研究者集団と、1984 年にドイツ社会学者とアメリカ社会学者のマクロ・ミクロリンク会議のドイツ側研究者サークルのメンバーたちである。彼等の運動は、1992 年にドイツ社会学会に「モデル構築とシミュレーション」部会を設置させる動きとなり、大学の枠を超えた学派運動の母体となっている (拙稿 181 号 pp. 75-76, pp. 77-78.)。

○オランダ説明社会学者が主体となって出した『合理的選択社会調査ハンドブック』を書評した Tutic に対して、「Lindenberg, Raub タイプの合理的選択理論社会学以外の Opp, Esser, Hedstrom タイプの系譜がない」という彼の指摘を揶揄したことがあった (180 号 p. 107)。またスイスの連邦工科大学を退職した、Andreas Diekmann の祝賀論集に寄稿した陣容から、第二世代の教え子たちがいまやヨーロッパのドイツ語圏合理的選択社会学の主要な担い手で

あるという印象を語ったことがあった (181号 p. 83-84.)。

2020年に刊行された社会科学入門シリーズの配本第1巻に, Andreas Tüticが編者となって, 『合理的選択』と題する入門書が刊行された。この編著で, Tüticがオランダ系の合理的選択論のハンドブックに対してあのような感慨を抱いた訳が判明した。彼は自分の編集した著書では, オランダ系のハンドブックの轍を踏まないように細かい配慮が施されている。若手の寄稿者は, スイス・チューリッヒ大学, ドイツ・ライプチヒ大学, マンハイム大学在籍者で占め, オランダ系では, ユトレヒト大学から, RaubとPrzepiorkaのふたり (PrzepiorkaはスイスでDiekmannの学窓出身でDiekmannと多数共著論文を出しているから, 実質的にはチューリッヒ系に数えるべきであろう), グローニンゲン大学からは, Vincentz Freyひとりである。分析スキーム, モデルも個性が強いOpp, Esser, Lindenbergの第一世代に比べ, Raub, Diekmann, Vossの第二世代は, 共同執筆, 共編著, 研究者の採用面での交流が活発で, 大学の隔壁がなくなり, 交流が進んでおり, その教え子である第三世代は国, 大学の隔壁が消滅している感がある。

わたしは, この論集のなかでは, Catherine Herfeldの「合理的選択理論の多様性」とSascha Grehlの「行動経済学と限られた合理性」と編者執筆の「合理的選択理論の異例」に惹かれた。最初のもは経済学の合理的選択理論 (thin version=empty version) の存在とRCT批判がどのバージョンに批判の矛先を向けたものかはっきりしないことを語った英文論文の縮小版である。しかし経済学以外の政治学, 社会学の合理的選択理論を俄に追加したため, それらは荒削りで付け足しの感を否めない。二番目は「確実性下の意思決定」「不確実性下の意思決定」「ゲーム理論の代替モデル」と節題を設け, 行動経済学の他「限られた合理性」研究の様々な動向を紹介している。最後のものは選好理論, 効用理論, 確率論, フレーミング効果, ゲーム理論の戦略的不確実性など, 経済学の合理的選択理論 (thin version) の例外, 異例への取り組みの動向が紹介されている。このほかにも, 「社会的ジレンマ」「公共財問題」「社会的ネットワークのなかの信頼」など興味深いものが並んでいる。もはや社会学の合理的選択理論は, アメリカよりもヨーロッパが完全に凌駕しているという印象をますます強くした。

●教養学部論集 181号 p. 84 文献一覧

Coleman, J.S. [1974] 1979の次に追加

Becker, G. [1979] 1982 *Der ökonomische Ansatz zur Erklärung menschlichen Verhaltens*. übersetzt von Monika Vanberg & Viktor Vanberg. Tübingen.

●教養学部論集 181 号 p. 84 文献一覧

- Diekmann, A/T.Voss** 2016 “Rational-Choice-Rezeption in der deutschsprachigen Soziologie.” in S. Moebius/A. Ploder (Hrsg.) *Handbuch Gesichte der deutschsprachigen Soziologie*. Wiesbaden : Springer. → **Diekmann, A/T. Voss** 2018 “Rational-Choice-Rezeption in der deutschsprachigen Soziologie.” in S. Moebius/A. Ploder (Hrsg.) *Handbuch Gesichte der deutschsprachigen Soziologie*. Bd : 1 : 663-682. Wiesbaden : Springer.
- Raub, W./T. Voss** 2018 “Micro-Macro Models in Sociology : Antecedents of Coleman’s Diagram.” in B. Jann/W. Przepiorka (eds.) *Social Dilemmas, Institutions and the Evolution of Cooperation*. pp. 11-37. Berlin : De Gruyter. → **Raub, W./T. Voss** 2017 “Micro-Macro Models in Sociology : Antecedents of Coleman’s Diagram.” in B. Jann/W. Przepiorka (eds.) *Social Dilemmas, Institutions and the Evolution of Cooperation*. pp. 11-37. Berlin : De Gruyter.
- Opp, K-D.** 2014 “The Explanation of Everything. A Critical Analysis of Raymond Boudon’s Social Theory.” *Revista de Sociologica* 99(4) : 481-594. → **Opp, K-D.** 2014 “The Explanation of Everything. A Critical Analysis of Raymond Boudon’s Social Theory.” *Revista de Sociologica* 99(4) : 481-514.

●教養学部論集 180 号 p. 114-115 文献一覧

- Raub, W./T. Voss** 2017 “Micro-Macro Models in Sociology : Antecedents of Coleman’s Diagram.” in B. Jann/W. Przepiorka (eds.) *Social Dilemmas, Institutions and the Evolution of Cooperation*. Berlin : De Gruyter. → **Raub, W./T. Voss** 2017 “Micro-Macro Models in Sociology : Antecedents of Coleman’s Diagram.” in B. Jann/W. Przepiorka (eds.) *Social Dilemmas, Institutions and the Evolution of Cooperation*. pp. 11-37. Berlin : De Gruyter.

文献

- Esser, Hartmut** 1993 *Soziologie. Allgemeine Grundlagen*. Frnkfurt : Campus.
- Opp, Karl-Dieter** 2004 “Review Essay, Hartmut Esser : Textbook of Sociology” *European Sociological Review* 20 : 253-262.
- Brüderl, J.** 2004 “Die Überprüfung von Rational-Choice-Modellen mit Umfragedaten.” in A.Diekmann/T. Voss (Hrsg.) *Rational Choice Theorie in den Sozialwissenschaften. Problem und Perspektiven*. S. 163-180. München : Oldenbourg.
- Barbera, Filippo.** 2006 “A Star is Born? The Authors, Principles and Objectives of Analytical Sociology.” *Papers Revista de Sociologica* 80 : 31-50.
- Raub, Werner & Thmas Voss** 2017 “Micro-macro models in Sociology : Antecedants of Coleman’s diagram.” in B. Jann & W. Przepiorka (eds.) *Social Dilemmas, Institutions and the Evolutionn*. pp. 11-37. Berlin : De Gruyter.
- Manzo, G.** 2007 “Progrès et ‘urgence’ de la modélisation en sociologie. du concept de ‘modèle générateur’ et de sa mise en CEuvre” *L’Année Sociologique* 57(1) : 13-61.
- Ylikoski, Petri** 2016 “Thinking with the Coleman Boat” Linköping University. The Institute for Analytical Sociology. The IAS Working Paper Series 2016 ; 1.1-38.
- Franco, Giuseppa** (Hrsg.) 2019 *Begegnungen mit Hans Albert. Eine Hommage*. Wiesbaden : Springer.
- Albert, Hans** 2007 *In Kontroversen verstrickt. Von Kulturpessimismus zum kritischen Rationalis-*

mus. Lit verlag.

- Hedstrom, P & R. Swedberg** 1996 “Social mechanisms” *Acta Sociologica* 39 : 281-308.
———. 1998 “Social mechanisms : An introductory essay.” in Hedstrom, P. & R. Swedberg (eds.) *Social Mechanisms : An Analytical Approach to Social Theory*. pp. 1~31. Cambridge Univ. Press.
- Elster, J.** 1989 *Nuts and Bolts for the Social Sciences*. Cambridge Univ. Press.
———. 1998 “A plea for mechanism” in Hedstrom, P. & R. Swedberg (eds.) *Social Mechanisms : An Analytical Approach to Social Theory*. pp. 454-73. Cambridge Univ. Press.
———. 2007 *Explaining Social Behavior. More Nuts and Bolts for the Social Sciences*. Cambridge Univ. Press.
- Maurer, Andrea** 2019 “Erklärende Soziologie. Anliege, Positionierung, Netzwerke und Rezeption” in Stephan Moebius & Joachim Fischer (Hrsg.) *Denkschulen der Soziologie in der Bundesrepublik Deutschland*. S. 277-315. Springer VS.
———. 2015 “Institutionalisierung der erklärenden soziologie nach 1945” in Andrea Maurer *Erklaren in der Soziologie. Geschichte und Anspruch eines Forschungsprogramms*. S. 35-49. Springer VS.
- Berger, R. & A. Tutic** 2014 “Review of Wittek et al (eds.) *The Handbook of Rational Choice Social Research*.” *Soziologische Revue*. 37 : 518-521.
- Tutic, Andreas** (Hrsg.) 2020 *Rational Choice*. Berlin : De Gruyter Oldenbourg.